

農村整備・活性化活動に関する地域リーダーの評価構造

浅井 悟

(東北農業試験場)

Structure of Evaluation of Regional Leaders for
Consolidation and Activity for Rural Revitalization

Satoru ASAI

(Tohoku National Agricultural Experiment Station)

1 はじめに

農村地域の総合的な活性化を目指した農村地域政策の展開が農政の重要課題となって久しい。これに対応して研究サイドでも地域「活性化」をテーマとして研究が展開されているが、個々の地域の「活性化」の状態をどのような指標で評価するかという点については必ずしも共通認識がない。そのため地域の「活性化」状態を相互に比較可能な状態で評価するための客観的・主観的指標の整理と体系化が重要な研究課題のひとつとなっている。

本論では、「活性化」の主観的な評価指標の問題に焦点を当て、どのような状態が「活性化」状態として認識・評価されているかを、岩手県内各市町村の地域リーダー層の意識を分析することによって明らかにする。

2 調査の対象と方法

調査対象者は「いわて・むらづくり塾」(農水省の21世紀村づくり塾運動の岩手県段階の推進組織で農業者、自治体・農協職員等を塾生として毎年募集)の塾生102名である。調査は1992年7～8月にかけて郵送方式(一部対象者を除く)で行い、回収数は75名(回収率73.5%)であった。

まず「活性化している地域」のイメージ抽出結果¹⁾を参考に、個別の農村整備・活動状況を評価するための29項目(表1)を設定した。調査では各項目についての対象市町村での整備・活動の現状(どの程度整備されているか・活動が展開されているか)と今後の必要性(どの程度整備が必要か・活動の展開が必要か)についての将来ニーズ、及び対象市町村の総合的な「活性化」の程度(どの程度活性化しているか)に関する各リーダーの主観的評価を7段階の評定尺度を用いて測定し、評定結果に得点を与えた(－3～3で評価が大きいほど得点が高い)。

表1 地域の物的基盤整備・活動状況の個別評価項目

X ₁ : 生産基盤の整備	X ₁₁ : 新技術の導入	X ₂₁ : 観光資源となる自然資源の存在
X ₂ : 圃場整備	X ₁₂ : 特産品化	X ₂₂ : 観光資源となる歴史資源の存在
X ₃ : 農道整備	X ₁₃ : 農産物の特産品化	X ₂₃ : 上下水道の整備
X ₄ : 生産資本の整備	X ₁₄ : 農産加工物の特産品化	X ₂₄ : 一般道路の整備
X ₅ : 機械整備	X ₁₅ : 他地域との交流	X ₂₅ : 集会施設の整備
X ₆ : 施設整備	X ₁₆ : 産直活動	X ₂₆ : レクリエーション施設の整備
X ₇ : 後継者の確保	X ₁₇ : 農村留学等の受け入れ	X ₂₇ : 地域行事への住民の参加意識
X ₈ : 中核農家の育成	X ₁₈ : 就業機会の多様性	X ₂₈ : イベント開催
X ₉ : 集団的な土地利用調整	X ₁₉ : 地場産業の振興	X ₂₉ : 伝統文化の保存
X ₁₀ : 作目の多様性	X ₂₀ : 観光資源の存在	

3 予備分析

予備分析として、県内の市町村を社会的・経済的条件によって類型化する作業を行った。データとしては東北農政局岩手統計情報事務所編の「岩手県農山漁村地域活力分析指標」²⁾を用いて、指標項目の中から地域の都市化の程度を表すと思われる10指標及び地域の農業生産の活力の程度を表すと思われる10指標を選択し、それぞれ主成分分析により求めた第1主成分を「都市度」・「農業度」を表す総合指標とした。この都市度・農業度の二次元データに基づいてクラスター分析を行い、市町村を次の五つに類型化した。都市型(都市度=大/農業度=中～大)、近郊型(都市度=中～大/農業度=中～大)、農業型(都市度=小～中/農業度=大)、沿岸型(都市度=中/農業度=小)、中山間型(都市度=小/農業度=中)。

4 評価構造の分析結果と考察

五つの地域類型別の評価の特徴を見るために、各類型の回答者ごとに、個別の29項目についての現状評価得点と将来ニーズ評価得点、及び総合的な「活性化」評価得点の平均値を求めた。結果の概略は次のとおりである(表2)。

<現状評価>

① ほとんどの地域類型で、自然・歴史などの観光資源や伝統文化という地域独自の資源の存在や、集会施設の整備についての評価が高い。

② 都市型・近郊型での就業機会や、農業型での圃場整備に対する評価が高く、地域条件がよく反映されている。

③ 総合的な活性度の評価については、都市型>近郊型>農業型>沿岸型>中山間型の順になっている。

表2 地域類型別の評価の特徴

地域類型		評価の大きい上位5項目					総合的「活性化」評価
		1位	2位	3位	4位	5位	
都市型	現状評価	X ₁₈ : 就業機会 2.8	X ₂₂ : 歴史資源 2.0	X ₂₄ : 一般道路 1.5	X ₃ : 農道整備 1.3	X ₂₉ : 伝統文化 1.3	0.8
	将来ニーズ評価	X ₇ : 後継者 2.3	X ₁₂ : 特産品化 2.3	X ₁₃ : 農産物 2.3	X ₂₃ : 上下水道 2.3	X ₈ : 中核農家 X ₉ : 土地利用 2.0	
近郊型	現状評価	X ₁₈ : 就業機会 1.8	X ₂₁ : 自然資源 1.7	X ₂₀ : 観光資源 1.5	X ₂₅ : 集会施設 1.5	X ₂₂ : 歴史資源 1.4	0.7
	将来ニーズ評価	X ₇ : 後継者 2.2	X ₁₈ : 産直活動 2.1	X ₂₃ : 上下水道 2.1	X ₈ : 中核農家 2.0	X ₁₄ : 加工物 2.0	
農業型	現状評価	X ₂₅ : 集会施設 1.4	X ₂₄ : 一般道路 1.3	X ₂₁ : 自然資源 1.2	X ₂ : 圃場整備 1.1	X ₂₉ : 伝統文化 1.1	0.3
	将来ニーズ評価	X ₂₃ : 上下水道 2.3	X ₇ : 後継者 2.3	X ₈ : 中核農家 2.1	X ₁₁ : 新技術 1.8	X ₁₂ : 特産品化 1.8	
沿岸型	現状評価	X ₂₁ : 自然資源 2.4	X ₂₂ : 歴史資源 2.4	X ₂₀ : 観光資源 2.0	X ₂₉ : 伝統文化 1.4	X ₂₅ : 集会施設 1.3	-0.1
	将来ニーズ評価	X ₂₀ : 観光資源 2.4	X ₃ : 農道整備 2.3	X ₁₆ : 産直活動 2.3	X ₁₁ : 新技術 2.3	X ₁₂ : 特産品化 2.3	
中山間型	現状評価	X ₂₁ : 自然資源 1.2	X ₂₂ : 歴史資源 1.2	X ₂₅ : 集会施設 1.2	X ₂₀ : 観光資源 1.0	X ₂₉ : 伝統文化 0.9	-0.9
	将来ニーズ評価	X ₂₃ : 上下水道 2.4	X ₈ : 中核農家 2.0	X ₉ : 土地利用 2.0	X ₇ : 後継者 1.9	X ₂ : 圃場整備 1.9	

注 1) 数字は類型ごとの回答者の得点を不明・無回答データを除いて集計した平均値である。

<将来ニーズ評価>

① ほとんどの地域類型で、後継者の確保や中核農家の育成の取り組みに対するニーズが大きく、農産物・農産加工物の特産品化が次いでいる。生活施設では上下水道整備についてのニーズが大きい。

② 近郊型で産直活動が、農業型で新技術の導入が、沿岸型で観光資源の活用が上位にあり、それぞれの地域条件のメリットを活かした取り組みのニーズが大きい。また中山間型では圃場整備と土地利用調整が上位にあり、不利な土地条件というデメリットの克服に重点が置かれている。

次に、全体のデータを用いて、個別の整備・活動についての現状評価（説明変数）が地域の総合的な「活性化」評価（目的変数）をどのように規定しているかを、重回帰分析によって明らかにした。ここでは多重共線性を回避するため分析に先立って説明変数のグルーピングを行った。具体的には、クラスター分析を用いて現状評価の相関の高い項目を抽出した。次に各クラスターごとに主成分分析を適用して求めた第1主成分を、次のように説明変数として代表させた。なお他の項目との相関が低い項目はそのまま説明変数として用いた。

$X_1 \cdot X_2 \cdot X_3 \rightarrow X_1'$, $X_4 \cdot X_5 \cdot X_6 \rightarrow X_4'$, $X_7 \cdot X_8 \rightarrow X_7'$, $X_{12} \cdot X_{13} \cdot X_{14} \rightarrow X_{12}'$, $X_{15} \cdot X_{16} \cdot X_{17} \rightarrow X_{15}'$, $X_{20} \cdot X_{21} \cdot X_{22} \rightarrow X_{20}'$, $X_{24} \cdot X_{25} \cdot X_{26} \rightarrow X_{24}'$, $X_{27} \cdot X_{28} \rightarrow X_{27}'$

こうしてグルーピングした説明変数を用いて重回帰分析を行い、最終的には次の評価式を得た。

$$Y = 0.226X_1' + 0.173X_7' + 0.237X_{11} + 0.105X_{15}' + 0.251X_{18} + 0.259X_{20}' + 0.201X_{27}' + 0.093X_{29} - 0.335 \quad (R^2 = 0.507 \quad DW = 1.882)$$

注. 係数は標準偏回帰係数を表す。() の数値は t 値であり, *, **, *** はそれぞれ 10%, 5%, 1% 有意水準を表す。

この結果から、特に総合的な「活性化」評価に強い影響を及ぼす評価要因は、就業機会 (X₁₈) と観光資源 (X₂₀) であり、次いで新技術 (X₁₁) と生産基盤 (X₁) であることがわかる。これらのうち就業機会は基本的な社会的・経済的条件によって評価が規定される変数である。これに対して観光資源の掘り起こしや新技術導入、生産基盤整備については、現状での地域差はあるものの、各地域の条件を活かした今後の整備・活動の展開によって評価が左右される評価項目であり、これらは今後の地域「活性化」対策の展開にあたって重要な戦略的要因となるといえる。

5 おわりに

以上、本論では、リーダー層の意識構造の分析から、試論的に地域「活性化」の主観的評価要因を明らかにした。ただこれらは地域条件の違いを捨象した一般的な評価要因であり、地域条件の違いによって評価要因の構造が異なることが予想される。この点については、今後、データを蓄積して実証分析を積み重ねる中で解明を図ってきたい。

引用文献

- 1) 神谷一夫, 門間敏幸, 1991. 地域活性化に関するイメージ抽出結果と考察. 東北農業経営・農村生活研究資料6: 67-81.
- 2) 東北農政局岩手統計情報事務所編, 1992. 岩手の地域活力: 149p.